

舞踊文化 E.T.C

NO.24



目 次

火と水の祭

学習院大学名誉教授 諏訪春雄

自然人アイヌ こころの歌と踊り

第22回 沖縄とアイヌ

アイヌ文化伝承者 四宅豊次郎

アジアの舞踊、おりふしの想い

～韓国・龍仁大学校&日本大学芸術学部～

日本大学教授 丸茂美恵子

平成27年度

黛民族舞踊文化財団活動予定

一般財団法人 黛民族舞踊文化財団

火と水の祭

学習院大学名誉教授 諏訪 春雄

火と水は人間が生きていくためには欠かすことのできない要件である。中国古来の陰陽五行思想、仏教で宇宙構成の要素とする五大では、火と水はそれぞれその中心を占める。それだけに火と水には共通点が多い。

火と水は神仏の賜物

火も水も神仏からの賜物であった。
火でみる。

大晦日から元旦にかけて行われる京都八坂神社のおけら詣りは、京都中の人々が火種を神からあたえられる行事である。おけらは菊花科の薬草である。社前におけらを燃やし、参詣した人々が吉兆縄にこの火を移して家に持ちかえり、雑煮の火種や神棚・仏壇のお灯明に使用する。一年の災難よけになると信じられている。

火は遡れば神そのものであった。日本人は竈などの火所に火の神がいると信じ、また、沖縄には現在も火の神を祭った祠がある。荒神、三宝荒神、土公神^{どこうじん}などの名で、さまざまな性格を付与されながらも火の神の信仰は日本人の生活に浸透している。

水も神仏の賜物である。正月に汲む若水の民俗には若返り、邪気祓いなどの特別の



鞍馬寺火祭り

働きがあると信じられている。このような信仰が生れた背景には、水じたいも神仏の賜物とする観念が存在する。その観念は、神社じたいの若水汲み、祭祀の始まりのお水取り、水神を祭る神社などによく現れている。

熊野牛王符を発行する熊野那智大社では元旦午前三時に那智の滝の水を若水として汲み、その水を使用して摺り初め式を行う。熊野三社を勧請した山形県村山市湯野沢の熊野神社では元旦最初の神事として、午前零時に年男の若水汲みを行う。井戸の前に立ち「神の心を汲みます」といって、一礼して若水を汲み、拝殿入口まで持参する。

火と水の合体

火と水は合体する。最初に聖水が汲みあげられ、その水を中心に複雑な火の祭典が進行するという構造は三信遠の花祭りに見ることができる。この霜月神楽の最初の神事は聖なる滝の水を汲みあげて祭りの庭に運ぶ「滝祓い」の神事から始まる。この水は火祭りと結合して湯立ての神事の主役となる。

若水汲みやお水取りは水を大地の存在と観念しているのに対し雨乞いの多くは水を天の竜神が管理するものと観念している。この天水観は日本の古来の水観念ではなく、大陸からの伝来である。



花祭りの湯立て神楽

水で払う罪と穢^{けが}れ

日本の社会に火の文化と水の文化は浸透していたが、しかし、日本人本来の文化は水であって火ではない。火の文化は中世以降に大陸から伝来して広まった。その事実をよく示す現象が払いである。罪やケガレを払う主役は古来火ではなく水であった。

『延喜式』の「六月晦大祓祝詞」には水で罪や穢れを払う観念がはっきりみえる。天下のあらゆる罪惡穢れを川に流すと川の神がそれらを海に運び、海の神がそれらをすべて呑みこんで浄化してしまうという思想である。罪惡を消滅させるものは水であつ



水の祓い 岡山西大寺裸祭り祭

て火ではない。この思想を反映して、古来、日本人の基本となる刑罰は「流刑」であった。罪はケガレであり、共同体の外に払い、清めなければならない。日本の刑罰に火刑が持ちこまれたのは中世であった。しかし、近世以降も犯罪の種類に関係なく刑罰の中心は流罪が占めていた。近代になって、刑法の改定がくり返され、明治四十一年（一九〇八）のドイツ刑法導入によって流刑は条文上で姿を消した。しかし、ケガレとしての罪惡観が日本社会から消え去ったのではなかった。稀な例を除けば日本における火葬の採用が八世紀の仏教伝来まで下り、明治を迎えるまで一般に普及しなかったことも考慮される。

= 自然人 アイヌ = こころの歌と踊り

第22回 沖縄とアイヌ

アイヌ文化伝承者 四宅 豊次郎

遠い南国の沖縄と、北国の蝦夷地^{えぞち}であったアイヌとは、どういう繋がりがあるのだろうか。

1965年（昭和40年）1月下旬、私達「訪沖アイヌ文化使節団」一行（男女10名）は、鹿児島港から沖縄丸という3千トン級の貨客船にのって、一路沖縄本島をめざして航行していた。

沖縄は、太平洋戦争以前までは「琉球」とも呼ばれていたが、これは、かつて中国と経済や文化的に交流していた時代の名であった。琉球は王国として認められ、日本はもとより広く中国、朝鮮や東南アジアとも交易していた。

中国が、沖縄を琉球といったのは、九州と台湾の間に弓なりに連なる列島であるからだ。どうして「訪沖アイヌ文化使節団」が組織されたのか、そこから始めなければならない。

私は、昭和36年10月末から阿寒湖^{あかんこ}アイヌコタン（部落）に住居兼店舗を持ち、この住民になった。私の店は民芸店「コロポックル」といい、広場を挟んで真向かいに弟子^{てしとよじ}豊治さんの店「コタン屋」があった。弟子さんは当時、このコタンの阿寒湖アイヌ協会長を務めていて、自分は書記兼会計係であった。

昭和39年9月下旬、弟子さんから電話があり「重要な相談があるので来て欲しい」とのこと、訪ねると用件は「沖縄へ一緒に行かないか」との急な申し出であった。

弟子さんは、太平洋戦争中に一兵士として現在の沖縄県糸満市^{いとまんし}に配属された。近くにある真栄平^{ま え ひら}部落では、仲吉喜行^{なかよし きこう}さんの家族と出会い親しき付き合いをした。



沖縄の象徴・守礼門

彼自身が戦闘^{かんげき}の間隙を縫っての島民とのふれあいは、幾度、自分の心を慰め^{なぐさ}生き延びることへと勇気づけてくれたことか。この話は、もう以前から何度も聴いていた。

沖縄の人々は自分達のことをウチナーンチュ（沖縄人）という。

ウチナーンチュウはアイヌ民族によく似ている。容貌、骨格、生活習慣や自然に対するものの考え方、祖先崇拝^{そ せんすうはい}、協調精神^{きょうちょうせいしん}など。

弟子青年は、1年近く真栄平部落の近くで過ごした。この地は沖縄戦の最後の激戦地、集落の人々も半数は犠牲になった。やがて沖縄戦は敗北、日本は終戦をむかえ彼も九死に一生を得て帰郷した。沖縄戦では、北海道出身の兵士が一番多く、そのうち半分以上が戦死している。中にはアイヌ兵士もいた。弟子さんは帰郷しても、沖縄南部での戦禍の有様は一日とて忘れることはなかった。

だから、機会があれば早い時期に沖縄を訪ね、戦友の霊^{とむら}を用い、世話になった真栄平部落の人々にも会ってお礼を述べたいと、常々考えていた。

それが思いがけなくチャンスが巡ってきた。詳しい経緯はここでは省くが、沖縄教職員会の招きであった。

—アイヌ民族の文化を話して、歌や舞踊を紹介してほしい—

沖縄本島をはじめ、各離島を巡って、日中は小、中、高校で公演し、夜間は一般人のため劇場や公民館で披露することになった。沖縄教職員会の当時の会長は、屋良 朝苗^{やらちよう びょう}氏。後に沖縄がアメリカから本土復帰されて初の沖縄県知事になった人物である。「公演については、もう諸事万端^{しよ じ ばんたん}ととのえて沖縄県内の学校へは、私の方から文書で通達してある」とのこと。教職員会の大ボスであるその大号令は何とも有難く力強いかぎりであった。

実は、ウチナーンチュ（沖縄人）と、アイヌ民族は、元来、深い関係がある。

沖縄では、本州（本土）に住んでいる日本人をヤマトンチュ（大和人）と呼んでいる。

現代の日本人は、歴史^{さかのぼ}を遡れば弥生時代に中国大陸や朝鮮半島からの渡来民族である。稲作や騎馬民族であった渡来民は、やがて先住していた民族^{とらいみんぞく}を征服、あるいは統合して、ヤマト国家を形成した。



訪沖アイヌ文化使節団のポスター

一方、アイヌ民族は縄文時代から、北海道ばかりではなく日本各地（特に関東以北）に居住していた。これを東北蝦夷とうほくえぞと呼んでいた。やがて大和朝廷による東北蝦夷征伐とうほくえぞせいぼつの歴史があり、次第に征服されていった。

しかし、江戸中期頃からは北海道のアイヌは日本人をシサム（善き隣人りんじん）と呼んで、特産物などの交易こうえきもしていたのである。

だからウチナンチュとアイヌは日本の原住民（あるいは先住民）である。

ウチナンチュとアイヌは元来、血縁関係は別にしても、親族、兄弟のようなものであり、決して他人とは思えない。

沖縄人とアイヌは南北に遠く離れていて、永い歴史の推移や諸事情のなかで、気候風土の異なる土地で、言語や文化は変遷へんせんしてきたが、共に＝アイヌ（人間）＝としての本質は変わらなかった。

沖縄には“イチャリバ チョウデ”という言葉があります。見ず知らずの人でも一度会って親しく話しあうと「それはもう兄弟になったようなものだ」と言うのである。

アイヌには“ウコ イ タック”という言葉があり、これは「お互いよく話し合う」という意味で、心底は沖縄人と通じる。

今回は「アイヌ文化使節団」がどんな活動をして交流し、お互いの文化を理解したかを報告します。



アイヌとウチナンチュ 沖縄教育委員会会館前にて
（前列左）弟子豊治団長 （後列右）筆者

アジアの舞踊、おりふしの想い

～韓国・龍仁大学校 & 日本大学芸術学部～

日本大学教授 丸茂 美恵子

私が本学海外派遣研究員として渡韓してから、はや15年が経つ。月並みな言葉だが、まさしく今“光陰矢のごとし”の心境…。2000年2月28日に日本を離れ、3月に入ると国楽院や舞踊院の建つ牛耳山^{ウミョウサン}一帯が、小さな黄色い花を枝に密に連ねたケナリ（連翹）で埋め尽くされた光景を思い出す。ゲストハウスと舞踊院・国楽院の行き帰り、その黄色の鮮やかさは私に夢や希望を与えてくれた。ケナリは、日本人が春に愛でる桜に代わって、韓国人に春の訪れを感じさせる花。日本では桜前線が北上し開花予想も出されるその頃、「日本人だから桜が恋しいでしょ」とソウルから車で約1時間の韓国民俗村^{ヨンニョン}まで花見に誘って下さった心配りのある韓国の方々。さて、この韓国民俗村のある京畿道龍仁市に今回紹介する龍仁大学校がある。

本学芸術学部の平成25年度事業計画のうち、海外交流の活性化の一つに龍仁大学校との交流推進が挙げられた。その交流推進のために派遣された一行の一員として、私は2013年9月に龍仁大学校文化芸術大学を訪問した。一行のメンバーはほかに山内良一事務長、佐藤一哉経理長、演劇学科小林直弥准教授（現・教授）。龍仁大学校で迎え入れたのは、文化財学科裴宰浩教授（文化芸術大学長兼）、朴智善教授ほかの教職員の方々。



訪問メンバー

左より小林教授・筆者・佐藤経理長・山内事務長
（龍仁大学校文化芸術大学本部 正面玄関にて）

訪問に先立つ前年の5月末、龍仁大学校文化芸術大学御一行が本学芸術学部へ来訪し、ミーティングが行われた。「龍仁大学校文化芸術大学」とは日本風に言えば「龍仁大学文化芸術学部」で舞踊、絵画、ミュージカル・演劇、国楽、映画映像、文化財、メディアデザイン、文化コンテンツの8学科から成っている。写真、映画、美術、音楽、文芸、

演劇、放送、デザインの8学科を有する本学芸術学部と組織的な共通をみるところから今後の交流の可能性―教員の交換や学生の授業参加、異文化体験など―について活発な意見が交わされた。それによって、11月中旬には本学芸術学部の宮澤誠一学部次長と木村政司海外交流担当（現・学部次長）が龍仁大学校の視察を行った。その翌年の6月中旬、龍仁大学校創立60周年式典に野田慶人芸術学部長が参列され、その約3ヶ月後に私たち一行の訪問となった。実は、私と小林教授が派遣された背景には野田学部長の特別な計らいがあった。龍仁大学校の朴仙卿副総長（現・総長）のご専門が伝統的な美術史であるところから、野田学部長の「まず伝統的な日本舞踊の教員との交流」でスタートを切る方針に従い、私と小林教授に白羽の矢が立ったのである。

本学部の樋口肇庶務課長と小林太一課員（当時）が交渉の窓口となり、行き届いた準備によって9月2日夕方に私たちは羽田を出発し、キンポ空港で許旭映画映像学科教授とキン・ゴンウォン教学課長の出迎えを受けた。翌日、龍仁大学校へ。午前中に裴教授の案内で朴総長を表敬訪問し、続いて舞踊学科・演劇学科の学生を対象に筆者は特別講義「日本舞踊について」を行った。パワーポイントで画像を豊富に用いながら日本舞踊の概念・歴史・制度・技法などを解説、講義の最後には佐藤経理長が本学部の授業や学生の様子をビデオ映像で紹介した。通訳は朴教授。女史は京都国立博物館で文化財修復の研修をした経歴を持った方で私とすぐに打ち解けることができた。昼食は朴総長が本格的な韓定食のレストランへご招待して下さり、ユン・カンジン演劇学科教授、ナム・スジョン舞踊学科教授らも加わって会食。午後は再びキャンパスに戻り、小林教授がワークショップ



筆者の特別講義の受講風景（撮影：山内良一）



ワークショップ「扇の技法」（撮影：山内良一）
扇を右手に構え、腰を入れて摺り足の練習をする学生たち

「扇の技法」を行ったが、学生たちの熱心に練習をする表情が印象的。続いて、その場所で本学部日舞コースが振付上演した創作舞踊（「ひととせー花鳥風月抄」「光・影」）のビデオを上映した。そうして、終了後にはキャンパス内（演劇学科や文化財学科）を視察する、というように1日で何と盛りだくさんのスケジュールをこなしたことであったろう。



創作「光・影」4年次生卒業制作
（提供：日本大学芸術学部演劇学科）



朴仙卿副総長（左より5人目）を囲んで記念撮影
（韓定食のレストラン前にて）

2日目は龍仁周辺の文化観光が用意された。「利川の陶器を…」という私の希望に^{イチョン}応えて利川世界陶磁センター（セラピア）を案内して下さった。ただそこは私の希望を叶える場所ではなく、15年まえに訪れた高麗青磁の或る窯元を私は再訪したかったのである。龍仁大学校の若い教学課員が必死に探して下さり、さらに車で奥へと入り、世昌金世龍名匠の工房へとたどり着いた。15年前、農家のような庭先に展示室があり、そのなかにズラリと並べられた高麗青磁のそれこそ息を飲むほどの美しさに感嘆した。日本では目にしたことのない、艶麗な青磁の質感と精緻な菊花の透かし彫りを特徴と

する高麗青磁。今はSECOMでセキュリティされた豪華な建物も増築されていたが、名匠の気さくな人柄は以前と同じ。その後、滞在先のホテルのある水原^{スウォン}へ帰り、ユネスコ世界遺産の華城^{ファソン}を裴教授の教え子である博物館員の案内で見学。15年前は広い野原に立って華西門や華虹門、城壁を眺めてきただけだったのが、今は城郭内は見事に市街地化され、猛暑のなか一巡りするのは容易でない広さに圧倒された。前号で取り上げた国楽院主催の国際学術会議「東洋と西洋の古楽譜と舞譜」の項で少し触れたが、韓国には優秀な記録文化の歴史があって、華城は『華城城役儀軌』^{ソンヨギグエ}に基づいて復原された実績が認められ、ユネスコ世界遺産に登録された。『華城城役儀軌』は華城の築造に関する経緯や制度・儀式などを網羅し、なかに城郭の設計過程、実際に建てられた建物の形態、規格と特徴などが記録されているという。翌日、龍仁大学校からの大歓迎を受けた私たちは名残惜しみつつ日本への帰途に立った。その3ヶ月後の12月中旬、裴教授、朴教授ら4名が本学芸術学部を訪問された。裴教授が「文化財の保存・韓国と日本」の特別講義をされ、本学部の先生方や学生たちと親交を深めた。翌日、一行はサントリー美術館で「平等院鳳凰堂平成修理完成記念 天上の舞 飛天の美」を鑑賞し、浅草寺などを観光した。このようにして両学部の交流は、両国の伝統文化を軸にお互いの学術や芸術を理解しあうというスタンスで始まった…。



本学部執行部の教職員による歓迎のレセプション
前列中央に本学野田学部長
左右に龍仁大学校の皆様（左より裴教授、朴教授）



創作「ひととせー花鳥風月抄」3次年生実習発表
(写真提供：日本大学芸術学部演劇学科)

平成27年度 黛民族舞踊文化財団活動予定

世界の踊りを楽しもう！フォークダンス教えあい・踊りあいの会

6月21日（日）13時30分～16時 会場：黛アート・サロン

「ジプシーの娘 ロシアのツィガーノチカ」 指導：ロシア親子の会カリンカ

9月6日（日）13時30分～16時 会場：黛アート・サロン

「南インド・ケララのティルワーティラカリ」 指導：プラクリティ

12月13日（日）13時30分～16時 会場：黛アート・サロン

詳細未定

10月アジア民族舞踊交流会

公演予定 舞踊公演……………10月15日（木）

調整中

アウトリーチ……………10月16日（金）

群馬県太田市内小学校

舞踊公演……………10月17日（木）

群馬県太田市藪塚本町文化ホール(カルトピア)

シンポジウム……………10月18日（日）

学習院創立記念百周年記念会館

舞踊公演……………10月18日（日）

学習院創立記念百周年記念会館

舞踊公演……………10月19日（月）

調整中

共演舞踊団 インド民族舞踊団「シャクティ」

琉球舞踊 重踊流

民族舞踊文化E.T.C No.24 2015年5月1日発行 発行人 加戸守行 編集人 黛民族舞踊文化財団事務局

東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F TEL 03-3583-3633 / FAX 03-3583-3639

ホームページ <http://mayuzumi.or.jp>

一般財団法人 黛民族舞踊文化財団